

《論文》

タンザニアの狩猟採集民ハッザによる食料獲得戦略の多様化

——民族観光と他民族の影響に着目して——

八塚春名*

**Diversification of Food Acquisition Strategies
among the Hadza Hunter-Gatherers in Tanzania:**Focusing on the Influence of Ethnic Tourism and
Interaction with Other Ethnic Groups

Haruna YATSUKA

要旨

本稿は、タンザニアに暮らす狩猟採集民ハッザの食料獲得に、観光を含む多面的な生計戦略と他民族の存在が与える影響を分析することによって、変化し続ける環境下でハッザが食料のアクセシビリティを維持／拡大しているかを解明することが目的である。結果として、ハッザは観光収入を利用して購入できる食料と、狩猟採集により獲得できる食料を、世帯／個人の状況や嗜好に応じて組み合わせて食事を構成していた。また、他民族とその家畜によって攪乱された環境下に生育する雑草性植物を採集・利用する事例から、他民族の存在は食料資源のアクセシビリティを高める可能性もあることが示唆された。従来、アフリカ狩猟採集社会の特徴として社会編成や生計戦略にみられる可塑性が指摘されてきたが、本研究から、ハッザは現代的な変容のなかでも個人の移動を繰り返しながら可塑性を発揮し、生計の基盤を柔軟に変化させて食料を獲得していることが明らかになった。

キーワード

現金収入、雑草性植物、個人の移動、狩猟採集社会の可塑性

1. アフリカ狩猟採集民の多様な生計と食をめぐる議論**1.1 多様化する生計戦略と食**

アフリカにおける食の特徴のひとつに、イモ類や穀類からなる主食と、複数の生業活動によって獲得される食材を使用した副食から成りたつことが挙げられる。安溪ら (2016) は、このような主食と副

* 津田塾大学学芸学部 (Tsuda University) yatsuka@tsuda.ac.jp

食から成り、共食を前提として大皿に盛られた食事を「農耕民の大皿料理」と呼び、現在アフリカの食文化の中核となっていると述べている。

一方、狩猟採集民の食事は、農耕民の食事のように主食と副食から成るものではないとされてきた。それは、狩猟採集が生業活動による報酬（食料）がすぐに得られる即時的収益システムであり（Woodburn 1982）、季節にあわせて獲れた／採れた食料を食べ、保存をしない「手から口への経済」（田中 1994）と考えられてきたことによる。しかし狩猟採集社会もさまざまな社会変容の影響を受け、多くの集団は狩猟採集とそれ以外の生計活動（たとえば賃金労働や交易、農耕や家畜飼養）とを柔軟に組み合わせている（Bird-David 1992）と、30年以上前から指摘されてきた。市川（1986）は、南部アフリカに暮らす狩猟採集民サン（San）が、かなり以前から狩猟採集を中心とする多面的な生計戦略をとってきたことを述べたうえで、そうした戦略が厳しい自然を生き抜くために必要であったと論じた。同じように、複数のアフリカ狩猟採集社会において実践されている農耕は、複合的な生業活動のひとつにすぎず、かれらは別の食料獲得の可能性をみつければ容易にそちらへ移っていく（Yatsuka and Ikeya 2020）という指摘もあり、アフリカの狩猟採集民は、周囲の生態的・社会的条件にあわせて生計の基盤を柔軟に変えてきた。

その結果として、狩猟採集民の食生活も大きく変化してきた。たとえば今村（2010）は、1990年代初頭のボツワナで定住地に暮らすようになったサンが、配給あるいは購入によって得たトウモロコシ、ソルガム、マメを主食としていることと、砂糖入りの紅茶がかれらの生活に定着しつつあったことを報告している。しかし興味深いことに、サンのあいだでトウモロコシが主食になったことにより採集の頻度や量は減少したが、採集植物への嗜好性や採集方法は定住の前後で変わらなかったという（今村 2010）。この「採集活動の質」は変化しなかったという今村の報告のように、狩猟採集民の生計戦略の変化は、食における嗜好に限らず、思考や社会関係といった点においても、すぐさま影響を及ぼすわけではないということも、多方面で議論されてきた（たとえば Barnard 2002）¹⁾。

ところで、市川（1986）は、アフリカの狩猟採集民は可塑性をもつゆえに非常に多様な社会であることを指摘しているが、他方、集団内の地理的な条件や生計戦略の違いを踏まえて、狩猟採集民の食の多様性や柔軟性を論じるという試みはあまりなされてこなかった。池谷も、サンの食に関する資料が、時間軸や地理的範囲が限定されてきたことによって、生業の一部が示されてきたに過ぎないことを問題とし、「長期にわたる時間軸において広い地域のなかで食文化の事例を位置づける試みが必要」（池谷 2021: 45）だと述べている。

本稿で対象とするのは、タンザニア北部に居住する狩猟採集民ハッザ（Hadza）である。ハッザは、1960年代から人類学者の関心を集めてきた民族であるが、研究の多くは「居住地域のなかでも、家畜や栽培植物への接触が最も少ない地域で実施されてきた」（Blurton Jones 2016a: 119）。その結果、農耕をはじめとする狩猟採集以外の生業活動に関する報告はほとんどない。しかし実際のところ、一部地域のハッザは半世紀以上前の1965年頃から農耕に従事しており（Blurton Jones 2016a: 119-120）、今日では小規模な農耕を実践するハッザは少なくない。おおぜいの他民族が移住してきた地域や、ハッザが民族観光に従事し、現金収入を得る地域もある（八塚 2017）。そこで本稿では、ハッザに関する先行研究が避けてきた、他民族の影響を多大に受け、観光を含む多面的な生計戦略をもつハッザの集団が暮らす地域をあえて対象とし、現代的な状況のなかでのハッザの食に注目する。

1) たとえば Barnard (2002) は、狩猟採集民の社会において生産モードが変わったとしても、食物分配のような集団内での経済的な関係は弾力的に存続すると述べている。

1.2 ハッザの食に関する研究と本稿の視座

ハッザの人類学的研究をおこなった Marlowe (2006; 2010) によると、ハッザは 878 種の食材を利用し、そのなかで種数が多い順に鳥類、哺乳類、漿果、根茎と続く。栽培植物や家畜は 7 種のみで、全体の 0.8% にすぎない。Marlowe は、1995～1996 年の調査期間にキャンプ²⁾に持ち込まれた食料の内訳をカロリーで換算し、以下の結果を示している。根茎 23.5%、獣肉 19.3%、バオバブ 19.2%、漿果 17.2%、ハチミツ 14.2%、その他 6.6%。その他の 6.6% には、葉菜やイチジクなどの漿果以外の果実に加えて、穀類が含まれる (Marlowe 2010)。さらに、ハッザはかなりの量の食料をキャンプの外で消費しており、とくに漿果はその 3 分の 2 が採集地で食べられ、それだけでもかなりのカロリーになるという (Marlowe 2010)。たしかに筆者も、*Cordia sinensis* (ムラサキ科) の果実を採集に行った先で、枝ごと折った *C. sinensis* を手に、座り込んで食べるハッザたちを何度も見たことがある。一方、トウモロコシなどはキャンプ内でのみ消費されていることと、ハッザの摂取カロリーの約 3 分の 1 がキャンプの外で食べられていることを考えると、全摂取カロリーに占める穀類の割合は極めて低い (Marlowe 2010: 126)。

こうした先行研究でほとんど注目されない穀類は、ハッザの獣肉やハチミツと他民族のトウモロコシやモロコシなどとの交換 (Hawkes et al. 2001)、教会関係者からの贈与 (Marlowe 2006)、他民族の賃金労働の報酬 (石毛 1968) として入手されてきた。石毛 (1968) は、ハッザが主食としてトウモロコシを利用する割合が高くなっていることを指摘し、その理由として、農耕民との交流の増加を挙げた。さらに石毛は、ハッザ女性たちはトウモロコシがあれば採集に行かず、トウモロコシが少なくなれば採集に出かけることを報告しているが、ハッザが採集植物よりもトウモロコシを優先して利用する理由については明らかにしておらず、また、トウモロコシへのきわめて強い嗜好があったというようなことも書かれていない。石毛以外にハッザがトウモロコシを頻繁に食べるという報告はなく、いずれの研究も林産物を中心に議論がなされてきた。

これらの先行研究と、本稿で注目する観光という生計手段をもつハッザの食生活は、結論からいえば大きく異なる。しかし両者はまったく異なる地域に暮らす集団の事例というわけではない。この背景には、ハッザの頻繁な移動がある。

1960 年代初頭までのハッザは、2、3 週間に一度という頻度で、個人あるいは世帯で、さまざまな理由により移動を繰り返し、キャンプの構成は非常に柔軟に変化していた (Woodburn 1968)。その後、タンザニア政府の定住化への圧力や他民族の移入による土地の喪失の影響も受け、移動は限定的なものになったが (Kaare and Woodburn 1999)、2007 年においても、個人は年平均 6.5 回の移動をしている (Marlowe 2010)。こうした頻繁な個人の移動は、観光がさかんな地域のハッザも変わらない。2012 年から 2016 年までの計 5 回、筆者が同じキャンプの構成員を調べたところ、1 回でもキャンプに居住していた人は全部で 84 人いたが、5 回とも居住していたのは 1 人、4 回: 4 人、3 回: 10 人、2 回: 18 人、1 回: 51 人であった。つまりほとんどの人は、筆者が訪れた 5 回のうち 1 回しかそこに暮らしていなかった。いなくなった人たちは、別のキャンプや数十キロ離れた定住村などさまざまなところへ移動し、その後にもまた戻ってくることもあった (八塚 2017)。以上から、たとえ観光に参入し現金収入が得られる生活であっても、ハッザは変わらず個人が頻繁に移動を繰り返していることがわかる。

今日のハッザは従来の狩猟採集にくわえ、小規模な農耕や観光といったさまざまな生計手段をもち、

2) キャンプとは、田中 (1971) によると、数家族の集まりで構成され、開放的で流動的なメンバーシップを特徴とする居住形態を指す。現代のハッザのキャンプは、乾燥した叢林のなかに、数～10 世帯ほどの規模で作られた集落である。

その比重は個人によってだけでなく、地域によっても異なるため、移動することによって生計戦略や得られる食料も変化する。だとすれば、ある時点では自然資源に大きく依存しているハッザも、別の時点では違う場所で観光に従事し、現金を得て食材を購入することもあるということになる。つまり、これまでハッザ研究で明らかにされてきたような食生活と、本稿が明らかにするような食生活は、一見相反するものようだが、実は切り離されるわけではなく、同じ人が、その両極端な食生活のあいだを歩き来していると推測できる。

本稿は、頻繁な移動というハッザの生活スタイルの前提を踏まえたうえで、観光といった現代的な生計手段をもち、他民族との接点が多い地域に暮らす集団が、変化し続ける環境下でいかに柔軟に食料のアベイラビリティを維持／拡大しているかを明らかにする。そのために、観光が食事の内容と食材の入手方法に与える影響と、他民族の存在がきっかけとなり、新たに食料資源として利用されるようになった植物の採集、という2点に着目する。最終的には、狩猟採集民の特徴として描かれてきた生計戦略の可塑性を、現代のハッザがどう発揮しているのかを考察する。

2. 調査地概要

ハッザはタンザニア北部のエヤシ湖 (Lake Eyasi) 周辺の複数地域に分散して居住しており、都市を含むあらゆる地域の居住者を合計しても、人口はわずか4,500人程度だといわれている (八塚 2017)。居住地域によって環境条件、近隣民族の生業やかれらとの関係などが異なるため、ハッザの生活スタイルも少しずつ異なる。図1の斜線部がおおまかなハッザの居住地域であり、なかでも南部地域³⁾は比較的降水量も多く、小規模な農耕に従事するハッザも少なくない (Blurton Jones 2016a)。また、北東地域では、マカオ・ワイルドライフ・マネジメントエリア (Makao Wildlife Management Area)⁴⁾に隣接して暮らすハッザも多く、かれらは自然保護区の設立や、近隣に暮らす農牧民による農地の拡大の影響を受け、狩猟採集の維持が難しい状況にもある。他方、本稿の調査地である東部のマンゴラ地区 (Mangola) は、タンザニアを代表する観光地である世界自然遺産のンゴロンゴロ保全地域に近く、マンゴラに暮らすハッザは狩猟採集に加えて観光業に従事している。今日、マンゴラ以外の地域では、小規模に穀類を栽培し、主食の材料として利用するハッザも多い。あるハッザはわたしに「畑をもたないのはマンゴラだけだ」と語ったこともあった。とはいえ、ハッザの居住地域はどこも降水量が少なく農耕適地だとはいいがたく (Blurton Jones 2016b)、天水に依存し、小規模に実施するかれらの農耕で、1年をまかなうほどの収穫量は期待できそうにない。

マンゴラは年平均降水量300～500mmという半乾燥地帯に属し、12月～5月頃までの雨季と、6月～11月の乾季に明瞭にわかれる。ここはハッザが古くから居住してきた地域のひとつであり、少なくとも1930年代にはハッザがこの地域の人口の多数を占めていた (Blurton Jones 2016a)。しかし、1920年代に入植したドイツ人が泉を拡大して灌漑溝をつくったことをきっかけに、降雨の少ないマンゴラに外国人や農耕民が移住してくるようになった。1930～40年代にかけては、宝石やサイの角

3) 以後、本稿において南部地域、北東地域などと表すときは、図1にあるハッザの居住地域内の位置を示すこととする。

4) ワイルドライフ・マネジメントエリア (WMA) とは、複数の村が集まって土地を提供しあって動物保護区を設立し、それを観光企業に貸し出して収益を得る仕組みである。マカオ WMA は 2007 年に Frankfurt Zoological Society の支援によって設立され、狩猟企業に土地を貸し出すことで収益を得ている (岩井 2017)。

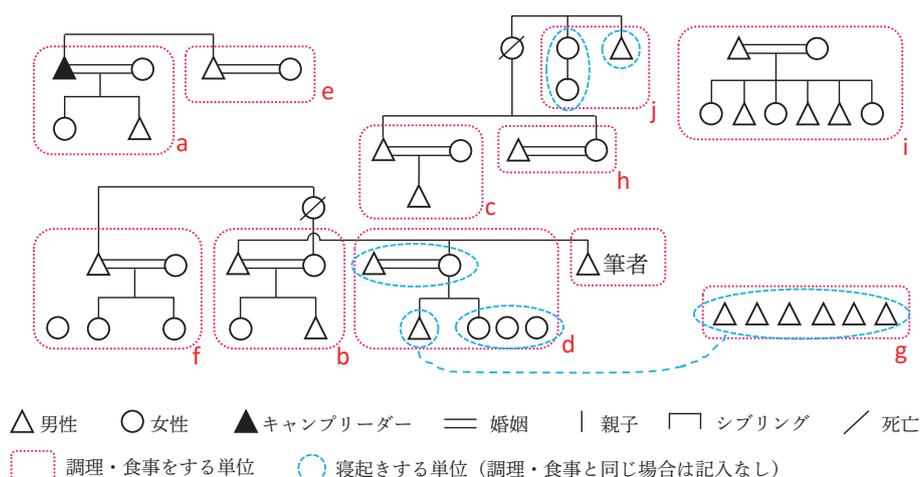


図2 キャンプAの居住者と調理および食事の単位 (2012年12月時点)

- * 本稿では基本的な調理および食事の単位を世帯とし、世帯を示すアルファベットは表1、図3と共通する。寝起きをする小屋はdとj以外は調理・食事の単位と同じであり、dは少女たちだけが別、jは男女で別の小屋を構えていた。
 - ** d、f、gにいる親子や兄弟関係のない個人は青年や少女であり、キャンプAの構成員と親族関係が一切ないわけではないが、ここでは詳細は省く。
 - *** 筆者が調理をともにした成人男性は調査期間中のアシスタントであり、筆者がいなければ世帯dとともに調理や食事をしていた。
- 出所：調査データをもとに筆者作成

た個人に入る (八塚 2017)⁶⁾。

マンゴラ各キャンプには、「キャンプリーダー」と呼ばれる人がおり、キャンプはリーダーの名前を冠して「○○のキャンプ」と呼ばれる。筆者が調査をした2012年～2016年のあいだ、マンゴラにはだいたい15のハッザのキャンプがあったが、それらはさまざまな理由により統合や分離をする。キャンプが新設されたり、キャンプリーダーが他所へ去った場合には、新しいリーダーが設けられる。キャンプリーダーは、観光や開発援助の場において現金や食料の受け手を務め、多くのキャンプでは入村料の管理をするのもキャンプリーダーである⁷⁾。調査をおこなったキャンプAには、2012年12月時点で13戸の小屋があり、成人20人、青年7人、少女3人、子ども14人が暮らしていた (図2、写真1)。基本的には核家族でひとつの小屋に暮らす。結婚前の青年と少女は、青年の小屋、少女の小屋で寝起きをし、未婚の男女はそれぞれ小屋を所有するか、親族と小屋をともにしていた。ハッザの小屋にはたいてい1つずつかまどがあり、図2のとおり調理と食事は基本的に小屋ごとにおこなわれるため、本稿では以後、「世帯」を、調理をともにする単位とする。

6) ハッザを対象にした人類学的研究の多くは、観光業をきわめてネガティブに評価してきた。観光収入によるアルコール依存の深刻化 (Blurton Jones 2016a)、観光がハッザにポジティブにはたらくように導くガイドの不在 (Madsen 2000) などが問題視されている。

7) キャンプリーダーはスワヒリ語で mkuu wa kambi (キャンプの長) と呼ばれる。キャンプリーダーがいつからどのような経緯で設けられるようになったかは明らかでないが、観光や開発援助の場において、キャンプリーダーが現金や食料の授受を担うことから考えると、観光や開発といった現代的な文脈のなかでつくられたと推察できる。Marlowe (2010) は、観光ガイドがキャンプの構成員への指示をキャンプリーダーに伝えたり、必ずキャンプリーダーに入村料を渡したりする習慣が、無意識のうちにハッザのコミュニティ内にヘッドマンをつくってしまうと警告している。



写真1 キャンプAのようす

出所：2016年、筆者撮影

ハッザは世帯ごとに移動をすることもあるが、性別を問わず個人で、あるいは片親と子どもだけで移動をすることもある。筆者は2012年から2016年までのあいだにキャンプAを複数回訪問したが、常にキャンプAにいたのはキャンプリーダーの男性だけであった。一方、キャンプAの場所は2012年の調査開始以来、2018年に場所を移すまで大きくは変わらなかった。多くのハッザは個人の移動の理由を「飽きた」、「疲れた」と語る。一方、雨季になると農耕をしたいとマンゴーラを離れたり、現金を稼ごうとマンゴーラにやって来る人もいる。また、滞在期間もさまざまで、当初考えていた予定が大幅に変わることも少なくない⁸⁾。キャンプのメンバーが頻繁かつ突然に変動することは、よほど人数が少ない限り、観光にとってたいした問題にはならない。というのも、観光でハッザに求められていることは、ブッシュを歩き、いつも決まった歌と踊りを披露することで、特別な技術は必要なく、誰でもできることであるからだ。一方、集団としてキャンプそのものを移動させることは、結果として観光客のアクセスが悪くなるといった問題が生じることもあり、それほど頻繁ではない⁹⁾。

キャンプAの人たちは、しばしばQ村中心部へ出かける。中心部にはタマネギ栽培に従事する農耕民が多く暮らしており、トウモロコシの醸造酒¹⁰⁾をつくって自家販売する世帯も少なくない。また、売店やバーも多い。キャンプAからは徒歩で乾季に1～1.5時間、雨季になると川を迂回しなければならないため約2時間かかるが、ハッザたちは飲酒や売店で買い物を目的にしばしば訪れる。

8) 移動は季節を問わずおこなわれるが、生業の季節性と関連付けて移動理由が説明されることはしばしばある。また、観光は移動のひとつのインセンティブになっていることは明らかであるが、観光化が進んだことによって移動の頻度が変化したかどうかは、まだ明らかでない。

9) これらに関する詳細は、筆者の別稿（八塚2017）を参照されたい。

10) マンゴーラでは、農耕民がトウモロコシを材料に自宅で作る醸造酒、それを蒸留させた蒸留酒、企業が製造した蒸留酒とビールが販売されている。醸造酒はつくった人の家で販売され、蒸留酒は家あるいは売店で、企業の蒸留酒やビールは売店やバーで販売される。これらの中で、醸造酒が最も安く一般的に飲まれている。本稿では断りなく「酒」と記す場合はトウモロコシの醸造酒を表す。

3. 観光で稼ぎ、食べ物を買う

3.1 食事調査の結果

キャンプ A をはじめマンゴーラの多くのキャンプでは、入村料による収入を使って、主食の材料であるトウモロコシ粉など、キャンプの構成員全員で食べる食料を購入する。また、観光客向けにおみやげが売れた場合は、儲けた個人が調味料、副食の材料、スパゲティ（乾麺）やコメ、炭酸飲料や蒸留酒、タバコ、子ども用のビスケットなど食品と嗜好品の購入に使うことが多く、とくにタバコや各種酒、炭酸飲料などの嗜好品の購入が目立つ（八塚 2017）。

2012年の雨季にキャンプ A の各世帯の食事を調べた結果を、表 1 と図 3 に示す。このデータは雨季に収集されたものであり、自然資源（とくに野生植物の果実や葉）が比較的豊富な季節のものである。多くの日において、観光客が去った午前 11 時頃と午後 8 時頃といった 2 回の調理がおこなわれていたことから、2012年 12 月 3～19 日にとられた 2 回×17 日×10 世帯の食事のうち、各世帯が不在の回とデータ未取得の回を除いた 259 回の食事を対象とした。ハッザは他世帯で食事をとったり、1 世帯が調理をしたものを複数人で食べたり、他世帯へ分配することも少なくない。さらに調理も食事もしない回も複数回あった。しかし、何らかの食事をした回のなかでは、8 割以上が穀類の主食と副食を組み合わせた食事であった（表 1 ⑧）。キャンプ A では、近隣農耕民から購入したトウモロコシを Q 村の製粉機で製粉してキャンプに持ち帰り、全員で消費していた¹¹⁾。マンゴーラのキャンプに暮らすハッザがトウモロコシを個人で買うことはめったになく、どのキャンプでも構成員全員で消費するものと考えられていた。トウモロコシ粉はキャンプ内のいずれかの小屋に置かれ、誰もが自由にアクセスできる。置き場所についての明確な決まりはなく、キャンプリーダーの小屋に置かれていることもあれば、それ以外の場合もあった。トウモロコシはアフリカで一般的にみられるような固練り粥（スワヒリ語で「ウ

表 1 キャンプ A に滞在していた 10 世帯が調理・準備した食事の形式

（調査期間：2012年12月3～19日、食事回数：n = 259回）

	世帯*									
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
①穀類の主食と副食の組み合わせ**	19	19	19 (2)	19 (1)	18 (14)	17 (1)	16 (2)	15 (3)	14 (2)	4 (1)
②穀類のみ	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0
③野生果実のみ**	2	1	1	0	2 (2)	1	2	2	0	0
④家畜肉のみ	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0.5
⑤紅茶のみ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0.5
⑥食事なし	8	9	6	8	8	12	11	6	7	4
⑦合計	30	30	28	28	28	30	30	23	23	9
⑧食事における①の割合 (①/SUM (①:⑤))	86.4%	90.5%	86.4%	95.0%	90.0%	94.4%	84.2%	88.2%	87.5%	80.0%

* 世帯のアルファベットは図2と共通する。世帯 j の食事回数が極端に少ないのは、この世帯の娘が入院し、同居の母親は病院に付き添っていたため、世帯を構成する 2 人ともに、長期にわたりキャンプに不在であったことによる。

** 括弧内は他世帯で食べた回数を示す。

出所：2012年12月3～19日のあいだの全 34 回×10 世帯の食事のうち、各世帯が不在の回とデータ未取得の回を除いた 259 回の食事を対象とした現地調査の結果。

11) ハッザを支援する団体や個人から各キャンプにトウモロコシ粉が配られたり、観光客がおみやげとしてトウモロコシ粉を持ってくることもまれにあった。

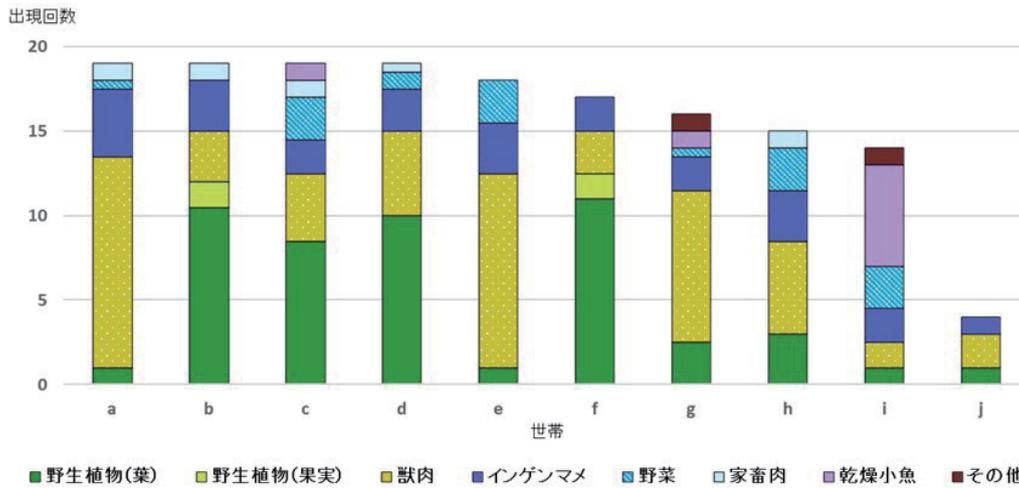


図3 キャンプAに滞在する10世帯が調理した食事において、主食（穀類）とともに供された副食食材の出現頻度
(調査期間：2012年12月3～19日、食事回数：n = 60回)

- * 各食材が調理された回数を数え、複数の副食が並んだ日も1品の量が少なくなるわけではないので、それぞれを1と数えた。
- ** 世帯のアルファベットは図2と共通する。

ガリ ugali) として食べられる。表1から、今日マンゴーラに暮らすハッザにとって、主食のウガリと一緒に副食を食べることが基本的な食事だといえる。

次に図3から副食について検討したい。図3では、野生植物（葉）と野生植物（果実）、獣肉の3種が狩猟採集によって得られたものであり、それ以外はQ村の売店などで購入されたものである。図から、世帯i以外の世帯では、副食の多くは野生の動植物によって構成されていたことがわかる¹²⁾。そのなかでも、世帯a、c、gは獣肉を食べた回数が他世帯に比べて多く、一方で世帯b、c、d、fは、採集した野生植物を食べた回数が多い。その差異の一つの要因として、世帯構成員の狩猟への参加の頻度が指摘できる。gは未婚の青年だけの小屋であり、キャンプリーダーである世帯aの夫とgの青年たちはしばしば狩猟にでかけ、獲物を持ち帰ってきたが、世帯b、c、d、fの構成員はほとんど狩猟へ行かなかった。キャンプへ持ち帰られた肉が多ければ、一部は解体後に各世帯へ分配され、残りは世帯aの小屋の前に干され、翌日以降に狩猟に参加した世帯が食べていた。一方、狩猟に積極的に参加をしない世帯b、c、d、fの女性たちはしばしば植物採集へでかけていた。植物採集については、次章で報告する。

ところで、表1には全世帯ともに「⑥食事なし」の回が複数回みられる。調理をしていなかったとき、彼女たちはしばしば「ウガリがないから食べられない」、「おかずがないから食べられない」と筆者に説明をした。表中、少ないながらも野生植物の果実や家畜肉¹³⁾のみで食事を終えた回もあるが、これらのセリフは、彼女たちに主食のウガリ（すなわちトウモロコシ粉）と副食がそろって食事になるため、どちらかが欠けていると食事として成立しないという考えがあることを示している。

以上の結果と先行研究とのあいだには、大きな違いがみられた。Marlowe (2010) のデータと比べて

12) 世帯iの副食に購入食材が多かった理由は、iの男性が世帯a、c、gと比べて狩猟に参加する頻度が低く、さらにiの女性は不在がちで他世帯の女性たちと採集に行くことも少なかったことである。

13) 表1のデータを収集した期間には、獣肉だけで食事を終える日はなかったが、別の期間には、大量の獣肉が手に入り、それだけで食事を終えることもあった。

マンゴローラでは、農作物や購入した食料を食べる頻度はきわめて高く、それは「主食と副食の組み合わせ」に対する嗜好性の高さと、穀類を購入できる状況があることによると考えられる。一方、林産物でも獣肉や採集植物などウガリとともに食べるものは先行研究同様に本稿のデータにも登場するが、ウガリと組み合わせて食べない根茎類は図3には出現しない。調査期間中に根茎利用が一切みられなかったわけではないが、調査対象にした1日2回の食事には登場しなかった。Marlowe (2006) ではキャンプに持ち込まれた食材を調査対象としているため、調査方法の違いによる点は大きいものの、やはりマンゴローラでは主食としてのウガリの定着度合いの高さが、その他の食材の種類や頻度に影響していると考えられる。

3.2 バイクタクシーの発達と食材入手方法の変化

調査をはじめた2012年、マンゴローラ地区にバイクタクシーはあったが、ハッザにとってはそれほど日常的なものではなく、ハッザが利用する移動手段は徒歩のみであった。しかしその後、訪れるたびに少しずつ状況は変わり、2014年にはバイクタクシーがQ村からキャンプAまで酒を運んでくるようになっていた。2016年には、キャンプAの近くに売店ができただけでなく、ハッザはバイクタクシーにQ村から食料の配達を依頼するようになっていた。この配達は決してフォーマルなものではなく、バイクタクシーの運転手がハッザから携帯電話¹⁴⁾で食料や日用品の注文を受け、村の中心部でそれらを調達し、バイクでキャンプAに運び、ハッザから現金を受け取るというものだ。Q村中心部からキャンプAまでのバイクタクシーの利用料は5,000Tshであり、ハッザにとっては、5,000Tshを支払うことによって、村まで歩くことなく欲しい商品を入手することが可能になった。キャンプAの人たちが名前と電話番号を知るバイクタクシーの運転手は数人おり、たいてい同じ人に依頼をしていた。つまり、運転手にとってはキャンプAのハッザたちは毎日のように仕事をくれる顧客でもあった。他方、運転手は電話で指示された商品を売店などへ調達に行くが、買い物行為に対して賃金が払われることはなく、支払われるのは運賃の5,000Tshだけであった。

表2は、乾季にあたる2016年9月3～8日の6日間に、バイクタクシーによってキャンプAにもたらされた商品を、購入者別に価格あるいは量とともに示したものである。この期間は乾季ゆえ、図3で出現したような野生植物の葉はほとんど入手できず、果実も手に入る種類はきわめて限定的になる。バイクタクシーが運んでくる商品は、トウモロコシ粉や酒のようなキャンプ全員で消費するものから、トマトや調理油のように世帯で消費するものまで、基本的にはなんでも対象であった。なお、2016年の調査結果を示した表2と2012年の資料をもとに作成した図2は、ともにキャンプAを対象にしたものであるが、人びとの移出入が激しいため多くのメンバーが異なる。

表2中、9月3日と7日はキャンプ全体で消費するためのトウモロコシ粉、9月4日と6日はキャンプ全員で飲むための酒¹⁵⁾や炭酸飲料をオーダーしており、それらのついでに、各人がそれぞれの欲しいものもオーダーした。また9月5日はこの地域に定期市が立つ日であった。市が立つ場所はキャンプAから遠く、行かない人たちはバイクタクシーに注文をしたが、この日は配達されず、商品は翌日に届

14) 2012年時にマンゴローラにおいて、携帯電話を所有するハッザは数人しかいなかったが、2016年頃にはハッザのなかでも携帯電話はかなり普及していた。ただしキャンプにおいて充電は難しく、村の中心部か、ジェネレーターをもつ近隣の売店で充電をしていた。

15) 地酒は50リットル程度の量を購入し、子どもも含めてキャンプ全員で消費することが多かった。まれに飲酒をしない人もいるが、飲酒の個人差を気にすることはほとんどない。一方で蒸留酒やビールなどは単価が高いからか、個人で購入されていた。

表2 キャンプAにおけるバイクタクシーからの購入品とその価格（2016年9月3～8日）

購入日	購入した商品	世帯ごとの購入価格 (Tsh) もしくは購入量*							全員で消費する商品の購入価格**
		k	l	m	n	o	p	q	
9月3日 (注文)	トウモロコシ粉								33,000
	トマト	1,000							
	葉菜	1,000							
	調理油	1,000	2,000						
	醸造酒	2,000							
9月4日 (注文)	トマト			1,000	1,000	1,000			
	葉菜		1,000						
	乾燥小魚			1,000					
	家畜肉			0.5kg					
	調理油			1,000	1,000	1,000			
	コメ				2,000				
	スパゲティ			2,500					
	牛乳			1ℓ					
	醸造酒 (60ℓ)								15,000
9月5日 (定期市) (注文→翌日配達)	トマト	1,000	1,000						
	ジャガイモ	1,000							
	サツマイモ	2,000							
	バナナ	2,000	2,000				1,000		
	サトウキビ	1,000	1,000						
	アボカド	1,000							
9月6日 (注文)	トマト		1,000	1,000					
	調理油	1,000	1,000						
	単3乾電池			2本					
	トランプ			1箱					
	携帯電話のプリペイドカード			1,000					
	炭酸飲料 (12本)								12,000
	醸造酒 (60ℓ)								15,000
9月7日 (持ち込み)	トウモロコシ粉								33,000
	トマト		+	} 1,500					
	魚		+					1,000	
	揚げパン	+	+	} 500					
チャパティ		+							
9月8日 (持ち込み)	トマト		500			200			
	葉菜	1,000	+	+		600			
	サツマイモスナック	1,000	1,000	+					
	タマネギ		+			} 2,500			
	トウガラシ		500						
	調理油	400		+					

* 購入価格がわかるものは価格(単位:タンザニアシリング・Tsh)で記入しているが、価格が不明なものは量や個数を示し、いずれも不明のものは購入したことを意味する+を記した。

** 全員で消費する商品は観光からの収益(入村料)から支出している。

出所:調査データをもとに筆者作成

けられた。一方、9月7日と8日は、ハッザが食料を購入すると聞きつけた村人が、バイクで商品をキャンプに持ち込んできた。売り手は7日に来たときに、「明日はおかずになるようなものをたくさん持ってきてほしい」といわれたことから、翌8日はタマネギ、葉菜などを持って朝からキャンプAに来た。なお、全員で消費するものを購入すると、バイクタクシーに支払う5,000Tshはキャンプ全体の観光収入から支払われ、個人の注文だけの日は、注文した人で5,000Tshを割り勘で支払った。

バイクタクシーによる商品配達背景には、ハッザの観光収入の存在が大きい。先述のとおり、以前までのハッザは観光で得た現金をもって村の中心部へ行き、トウモロコシ粉や酒を購入していたが、キャンプから村までの距離の遠さが問題であった。かつては、トウモロコシ粉を買いに出かけた人がその日のうちにキャンプへ帰って来ず、キャンプのメンバーは空腹のまま寝ることもしばしばあった。しかしこの問題をバイクタクシーが解消し、キャンプに暮らしながらさまざまな食材が容易に手に入るようになった。

また、キャンプAではバイクタクシーだけでなく、近隣に暮らす農牧民イラクに水汲みを依頼することもある。水場が遠く家畜をもたないハッザにとって水の運搬は重労働で、イラクもそれをわかってか、20リットルの水を1,000～2,000Tshと高値で販売しているものの、ハッザは水代を観光収入で支払うことができる。さらにイラクはハッザのツケ買いも許しており、ツケで買った分は、おみやげが観光客に売れば返金することで了承されていた¹⁶⁾。

ところで、表2において、副食やスナック類は世帯単位で購入・消費されているが、トウモロコシ粉と地酒はキャンプ全員で共同購入・消費されている。さらにいえば、主食用の食材であってもコメやスパゲティは世帯単位で購入されている。この違いが何に起因するのかについて本稿では明らかにできないが、実は世帯で購入したもので、その後他世帯に分配したり、調理したものを居合わせた全員で食べたりと、消費の段階では共同であることが少なくない。また、南部地域で農耕にも従事するハッザ男性からは、彼の居住地では狩猟で得た肉は親族間で分配するものの、畑で栽培した穀類は世帯のものとして認識され分配しないと聞いたことがある。おそらくこの場合も調理後の分配や共食はおこなわれると考えられるが、食料の種類によって生じるシェアリングの範囲の区別については、今後の重要な課題としたい。

4. 他民族の居住地跡に生える雑草性植物の利用

この章では、図3において世帯b、c、d、fが多く食べていた野生植物（葉）について、その採集場所を分析することから、植物の生態とハッザによる利用の実態を明らかにしたい。これらの野生植物のいくつかは、「ムレンダ (mlenda)」という料理になる。ムレンダとは、タンザニアの公用語であるスワヒリ語で「粘り気のある副食」を指す総称で、主食となるウガリにつけて食べられる。タンザニアで広く食べられるムレンダは、オクラとカボチャの葉を材料につくられるが、地方では身近な場所に生育する植物を採集してつくられるため、地域ごとに多様な植物が材料になる（八塚 2011）。多くのハッザたちはムレンダをとても好む。

16) ハッザによるこうした観光収入の用途に対しては、結局のところ他民族へ現金が流れていくだけだという批判もあるだろう。しかし、これまでの両者の関係は、他民族がハッザに対して明らかに差別的な態度をとり、ハッザも他民族を避けてきた (Blurton Jones 2016a: 128) ということを踏まえると、観光収入を介した食材や水の調達、民族間関係を少し変化させているとも考えられる。

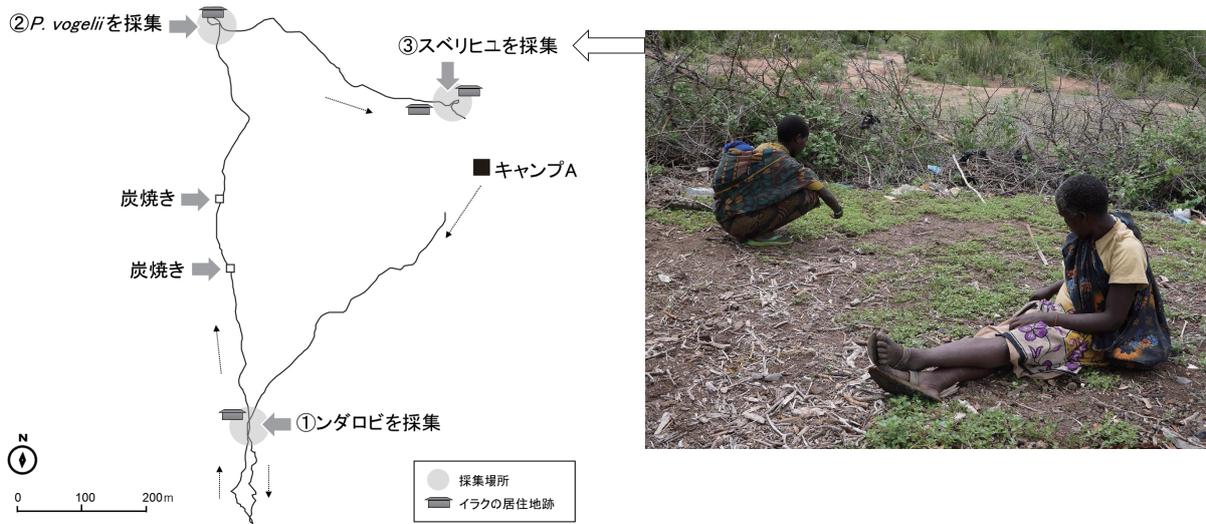


図4 採集ルート (2012年12月12日)

出所：GPSデータをもとに筆者作成、写真は③の場所にて筆者撮影

キャンプAの女性たちが葉を利用するために採集していた植物のうち、同定ができたものは、バオバブ (*Adansonia digitata*、パンヤ科)、*Erythrococca menyharthii* (トウダイグサ科)、*Amaranthus graecizans* (ヒユ科)、*Ceratotheca sesamoides* (ゴマ科)、*Limeum viscosum* (ザクロソウ科)、*Peponium vogelii* (ウリ科)、スベリヒユ (*Portulaca oleracea*、スベリヒユ科) の7種であった。このうち前者2種は木本であり、後者5種は草本で、そのうち *P. vogelii* を除く4種は攪乱地に適応した「雑草性植物」(阪本 2009)¹⁷⁾ である。そのなかのひとつ *C. sesamoides* は、近隣民族イラクの言葉でンダロ (ndalo) と呼ばれ、マンゴーラに暮らす他民族のなかには、乾燥させて粉にしたものを家で販売する人もいる。ハッザはこの植物および粉にしたものを、ンダロビ (ndalobi) と呼ぶ。マンゴーラ以外の地域に居住するハッザのなかには小規模な畑を所有する人も少なくなく、畑に生えるンダロビを採集し、乾燥保存する人もいる。しかしマンゴーラではハッザは畑をもたない。ではマンゴーラのハッザはこれらの植物をどこで採集しているのか、キャンプAの女性たちがたどった雨季における2回の採集活動の経路を図で示しながら紹介する。

事例1：2012年12月12日 (図4)

女性たちはキャンプAを出てしばらく進んだ①のあたりで、ンダロビの葉を採集した。その後、他民族による炭焼き場をとおり、②のあたりで、*P. vogelii* の葉を採集し、最後にキャンプから近い③でスベリヒユを採集した。③は農牧民イラクの居住地跡で、まだ家も家畜囲いも残ったままであった。女性たちはその家畜囲いにスベリヒユがたくさん生えていることを知っており、出かける前からスベリヒユを採集しに行こうと筆者を誘っていた。図4中にイラクの居住地跡を示したが、この日女性たちが植物採集をおこなった場はいずれもイラクの居住地跡やその付近であった。

17) 阪本 (2009: 21) は、人間による環境攪乱によってできた新しい場所にうまく適応して生活する植物を「雑草性植物」と呼んだ。

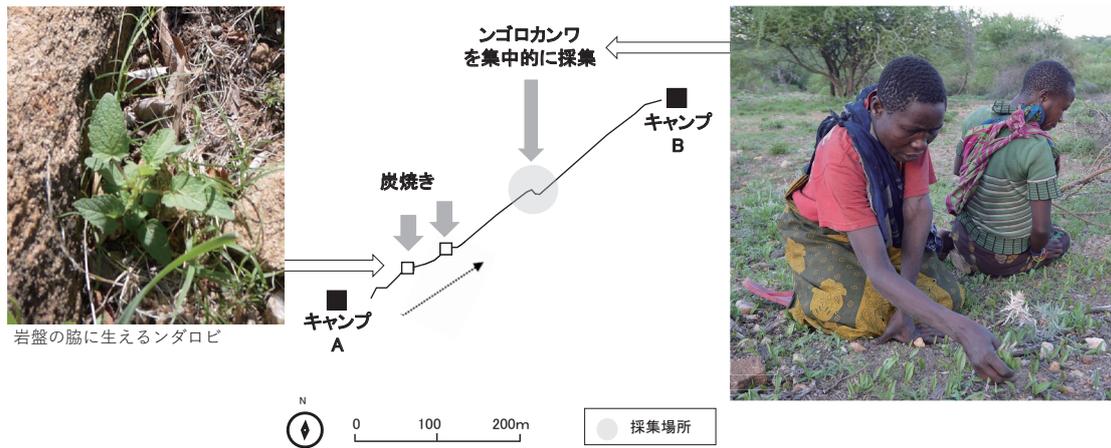


図5 採集ルート (2012年12月17日)

出所：GPSデータをもとに筆者作成、写真は各場所にて筆者撮影

事例1を観察した12月半ばは雨季にあたる。この事例から、雨季にハッザ女性たちが、近隣に暮らすイラクの居住地跡で、攪乱環境下に生える雑草性植物を採集していることがわかる。マンゴーラのブッシュでハッザの近隣に暮らすイラクは、農耕を行わずに牧畜だけに従事し、たびたび住居を移している¹⁸⁾。かれらの住居には家畜囲いが設けられており、雑草性植物は家畜囲いの跡地によく生育していた。事例1とは別の日、筆者がハッザ女性らと歩いているときにイラクが放棄した家屋を見つけ、「かれらは引っ越したのか」と問うと、「そうだ」という返事の後に、ひとりの女性が「今度ここでおかずを採れるね」といった。こうしたことから、彼女たちがイラクと家畜、そしてそこに生える雑草性植物との関係性を把握し、かれらの居住地跡を採集地として積極的に利用していることが明らかである。他方、次に示すのは、居住地跡ではない場所で採集する事例である。

事例2:2012年12月17日(図5)

ひとりの女性が、「きのうムチチャ (*A. graecizans*) を採りに行ったら、そこに予想外に大きなンダロビがあった」と他の女性たちに話したことから、筆者を含む5人で採集に出かけることになった。彼女たちはキャンプAを出て北東へ少し進んだ岩盤が露出する場所で、岩盤の脇に生えるンダロビを採集した。その場所にンダロビが生えている理由を女性たちに尋ねると、「ンダロビはディクディクの糞から生えてくる」、「ここはウンが通っているから」という答えが返ってきた。その後、他民族が炭焼きをしている場所を2か所通り、ハッザ語でンゴロカンワ (ngolokanwa /未同定) と呼ばれる植物の葉を集中的に採集した。採集を終えると、隣接する別キャンプBに寄り談笑してからキャンプAに戻った。

筆者はこれまでタンザニアの別地域で、畑に生えるンダロビを多く観察してきたが、畑以外の場に生えるものはほとんど見たことがなかった。「ディクディクの糞から生える」、「ウンが通る」という答えから、動物によりンダロビの種子が散布されていることと、家畜によってつくられた攪乱環境にンダロ

18) ブッシュに暮らすイラクが観光に直接参加をすることはほとんどない。一方、3章で触れたように、ハッザが観光収入を使ってイラクに水汲みを依頼するなど、間接的に観光から利益を得ることはある。

ビが生えることを彼女たちが認識していると思われる。また、事例1、2ともに、キャンプAから比較的近い場所で雑草性植物を採集していた。

採集した植物は、そのまま煮込むか、石で叩いて細かくしてから調理をする¹⁹⁾。採集植物は、やわらかく煮込まれた葉のソースになったり、水溶性の粘性物質が出るンダロビは粘り気のあるムレンダになる。これらにウガリをつけて食べる。他地域を含めてタンザニア内で、野生、栽培問わず、植物の葉を調理したものを主食なしに食べることはほとんどない。

これらの事例から、ハッザが、野生植物の果実や堅果、根茎だけでなく、草本植物の葉を採集すること、そして採集した葉は調理され、ウガリとともに食べる副食になることが明らかになった。また、その対象として、他民族の居住地跡や家畜の通り道のような攪乱環境に生える雑草性植物が多いこともわかった。つまり、他民族（とくに牧畜をおこなうイラク）がキャンプの近くに居住することによって、ハッザは間接的に副食の材料を採集する場を獲得している。以上から、主食と副食の組み合わせからなる食事が一般的になったという食生活の変化、主食を購入する現金を獲得できる観光業への参加、他民族とかれらが飼養する家畜の存在といった複数の要因が、雑草性植物の利用というハッザにとって新しい植物との関係をつくり出したと考えることができる。

5. まとめと考察

5.1 食料のアクセシビリティを支える生計戦略の柔軟性

本稿では、観光業の影響を強く受け、他民族との接触が頻繁な地域に暮らす狩猟採集民ハッザの食料獲得の手段と食事の内容について検討してきた。その結果、マンゴラにおけるハッザの食事の多くは、農耕民の食事のように主食と副食から成ること、主食の材料であるトウモロコシ粉をはじめ、さまざまな食材が観光収入によって購入されていることが明らかになった。食事調査の際、彼女たちは「ウガリがないから食べられない」、「おかずがないから食べられない」と語ったように、主食と副食が両方揃うことが望ましいと考えられていた。そしてその主食の材料となる穀類は、かつてのマンゴラではハッザが他民族による日雇い労働の報酬として得ることがあったが、今日のマンゴラでは観光収入があるからこそ入手可能なものであった。また、食料を購入する際に、近年ではブッシュのなかのキャンプにしながら、バイクタクシーによる配達を利用できるようになっており、とくに乾季には配達を積極的に使って食材を購入していた。一方で、バイクタクシーが普及した今日でも食用植物が豊富になる雨季には、獣肉や雑草性植物など狩猟採集によって獲得される食材も多く食べられている。さらに付け加えると、ハッザは一番好きな食べ物としてヒヒの肉を挙げる人が多く、農作物や購入食品を多く利用するなかでも、獣肉や野生植物は引き続き好まれていることも事実である。以上から、本稿で対象にした今日のマンゴラに暮らすハッザは、狩猟採集とともに、観光による現金収入を使いながら多様な食料を利用していることが明らかになった。

以下では、マンゴラに暮らすハッザの食料のアクセシビリティにどのようなファクターが影響を及ぼしうるのか、また、そうしたさまざまなファクターに対して、人びとがどのように生計戦略を変化さ

19) バオバブの種子やトウモロコシも石を使って砕くことはあるが、近年、穀類には製粉機を使うことが一般的である。かつて石毛（1968）は、ほとんどのハッザは臼や杵を持たず、石の上でトウモロコシを叩きつぶして粉にすると報告した。筆者はハッザがトウモロコシを石で叩きつぶすようすや、ハッザが所有する石皿を確認したことはあるが、とくに石皿の所有については、どれほど一般的かはわからない。

せながら食料選択の幅を維持・拡大しているのかについて考察する。表2で示したバイクタクシーの利用は、乾季に取得した資料にもとづくものである。バイクタクシー自体は通年にわたり利用可能であるものの、雨季になると悪路が続くハッザのキャンプにはバイクでアクセスできなくなることもある。逆に乾季になると、バオバブなどいくつかの堅果や根茎類は利用できるものの、野生植物の葉をはじめ、手に入らない資源は多い。これはマンゴーラに限らず他地域も同様に、半乾燥地帯では雨季と乾季で自然資源のアベイラビリティは大きく異なり、乾季はきわめて限定的になる。それゆえ乾季には、乾燥小魚やインゲンマメなどといった食材を購入する機会が増える。そうであるならば、ハッザの購入食料への依存にも季節性が生じるだろう。図3で示したデータはバイクタクシーが今ほど普及する前であったが、今日でも雨季には、バイクタクシーへの依存度は下がり、購入品は、近隣の売店で手に入れる程度になると考えられる。

さらに、観光入込客数も季節により大きく変動し、マンゴーラでは乾季にあたる6～9月が最も客数が多くなる²⁰⁾。繁忙期には毎日のように現金収入が見込めるが、観光客を伴わない狩猟採集に割ける時間は短くなる。また主として繁忙期は、植物性の自然資源が不足する乾季に当たるため、結果的に、乏しい食事情を観光収入による食料の購入によって補うことができている。他方、閑散期になると現金収入は減るが、みずから狩猟採集に赴く機会はいじゅうぶんに確保できるだけでなく、他地域にある畑で農業をするために移動したり、雨季であれば採集植物を積極的に利用したりすることもできる。元来、観光は不安定な産業であり、季節だけでなく、さまざまな外生のインパクトによって影響を受ける。気候、インフラ事情、観光客数といった、かれらを取り巻く生態・社会的な複数のファクターは変化しやすく、生計手段や食料へのアクセス方法も容易に変わり得る。マンゴーラのハッザは、現金で購入できるものと自分たちが好む狩猟採集により獲得できる食料を、複数のファクターにあわせて柔軟に組み合わせながら、食事を構成している。

こうしたハッザの柔軟な対応が顕著に表れたのが、2020年以降の新型コロナウイルス感染症流行下である。タンザニアでも観光業は大打撃を受け、ハッザも観光客が来なくなり経済的には被害を受けた。しかし、マンゴーラのような観光がさかんだ地域に暮らしてきたハッザたちは、「どことなく姿を消し、狩猟採集民としての生活スキルを駆使して暮らしている」(Dorobo Fund 2020)と報告された。2020年の雨季は降水量がきわめて多く、水も植物も豊富で、ハッザが狩猟採集をするには好条件だった。つまり、かれらは観光を離れ、豊富な自然資源に頼って狩猟採集を中心とする生活へと移ったことにより、ハッザは新型コロナウイルスの感染拡大による影響をあまり受けなかったようだ(Peterson 私信²¹⁾)。つまり、かれらはマンゴーラ的生活スタイルに不可逆的に移行したわけではなく、複数の生業活動のあいだをいつでも好きなときに往来し、食料を得て、生活を構築しているということが明らかになった。

5.2 雑草性植物の利用からみる新しい資源利用の展開

穀類や購入食料を積極的に利用しても、ハッザは自然資源を利用しなくなったわけではなかった。し

20) エヤシ湖文化観光プログラムの資料によると、毎年8月が最も観光客が多く、4、5月が最も少ない。たとえば2010年の場合、6～9月の4か月で年間の観光入込客数のうちの51%を占めた。これは、欧米の観光シーズンと連動しているのはもちろんのこと、乾季にあたる6～9月は過ごしやすい気候であり、かつ、降雨によって車両通行不能となることもないため、観光しやすいことも関係する。

21) Peterson, D. は、ハッザらタンザニアの少数民族を支援するDorobo Fundの代表をつとめる。この情報は、2020年5月28日、11月9日の個人的なやりとりによる。

かし、マンゴーラのハッザが利用している植物資源のなかには、先行研究で報告されてきたハッザによる野生植物利用には含まれなかった雑草性植物が多くみられた。それらは雑多な民族が暮らすマンゴーラだからこそ生じる環境変化をハッザが利用した結果である。そこで本節では、ハッザの雑草性植物の利用に着目して、ヒト-植物関係の展開について考えたい。

ハッザは雨季になるとキャンプの近くで草本植物を採集しており、とくに牧畜に従事するイラクの居住地跡や、家畜によって攪乱された環境に生えてきた雑草性植物を積極的に採集していた。できあがった料理をみる限り、雑草性植物は主食なしに食べられるものではないことから、主食用の穀類とともにハッザのあいだに普及したと考えられる。また、ハッザが *C. sesamoides* をイラクの言葉を借用してンダロビと呼んでいる点から、この利用は近隣に暮らすイラク由来だと推察できる。とはいえ、ハッザによる穀類利用は最近になって始まったものではない。1927年と1937年にイギリス植民地政府によりハッザの定住化が試みられた際には、トウモロコシの食事が配給されている²²⁾(Ndagala 1985)。独立後も度重なる定住・農耕化政策が実施され、そのたびに穀類の種子や農機具、製粉機などが導入された(Ndagala 1985)。また先述のとおり、60年代には、日雇い労働の報酬として他民族から現金や農作物を受け取っていた(石毛 1968)。今日、マンゴーラ以外の地域では、ハッザみずから穀類を栽培する例は少なくない。南部地域において農耕を実践するハッザたちのなかには、畑で雑草性植物を採集し、乾燥保存する人もいる。筆者が雑草性植物の採集に同行した女性たちのほとんどは南部地域の出身で、彼女たちは *C. sesamoides* をはじめとする雑草性植物を幼少期から食べているといった。つまり、少なくとも30年以上前からハッザはこれらの植物を食べていたというわけだ。しかし現在のマンゴーラに、ハッザの畑はない。それゆえマンゴーラのハッザたちは、他民族とその家畜、さらにはディクディクといった野生動物と、植物との関係を把握して、採集場所を見出し、植物を利用している。

ヒト-植物関係を扱う研究においては、ヒトと植物という異種間の関係性がさまざまなレベルで検討されてきたが、本稿の雑草性植物の利用では、他民族が牧畜という生業活動をとおして植物とおりなす関係を、第三者であるハッザが把握し利用していた。またその背景には、半世紀以上にわたる他民族との接点、観光収入により穀類の主食を食べることが日常化した食生活、生計手段の増加や現金稼得といったヒトの社会・経済面における変化があった。つまり、複数の要因が重なり合うことで、新しいヒト-植物関係を生み出していたといえる。雑草性植物は毎年同じ場所での採集が確約されるものではないが、近隣にイラクや家畜がいる限りは、どこかで必ず手に入るものである。つまり、他民族との接触は、ハッザにとって食料資源のアベイラビリティを高めてくれる可能性もあることが示唆された。

5.3 おわりに——変容する社会における狩猟採集民の「可塑性」

冒頭で述べたとおり、各地の狩猟採集社会を対象にした多くの研究から、現代において狩猟採集だけに依存する集団がほとんどいないことは自明であり、本稿で対象としたハッザも、観光業にも従事しつつ、さまざまな手段で食料を獲得していた。マンゴーラのハッザの食事はハッザ全体を見渡しても購入品の多さなどが際立ち、すべてのハッザの食事を代表するものではない。しかし、ハッザが地域を越える広域な移動を繰り返していることを考えると、誰もがあつた一時期は本稿で示したような食生活を送る可能性があるということとはたしかだ。筆者が2012年にキャンプAで会ったサジェという男性は、2013年にはマンゴーラから遠く離れた観光客が来ない地域に移動していた。サジェはその理由を「毎日酒を

22) しかし、いずれの年の定住化政策も、多くのハッザが病気で亡くなったり、ブッシュに帰っていったりしたため、数週間で終了した(Ndagala 1985)。

飲んでばかりの生活には疲れた」と語り、移動先のキャンプの小屋には、筆者が訪れた前日にしとめたキリンの肉が干されていた。そして、その後しばらくサジェをマンゴーラで見かけることはなかった。しかし2019年、久しぶりにサジェをマンゴーラの売店で見かけ、戻ってきたのかと聞いたところ、彼は当たり前のように「そうだよ」と答え、手にした炭酸飲料を飲んでいた。サジェにとってマンゴーラに戻ってきたことは、とりとめて理由を説明するようなことではなく、また、サジェのようにマンゴーラとその他の地域との往來を繰り返すハッザは非常に多い。

別稿において筆者は、ハッザが不確実な観光に対して過度な期待をせず、観光はあくまで狩猟採集や農耕なども含む複数の生計手段のひとつだと捉えているようにみえることを論じたが（八塚2017）、本稿から、食料の獲得も同様に、ひとつの手段に固執することなく、多様な選択肢を維持していることがわかった。先に述べたとおり、気候、観光客数、インフラ事情、近隣民族関係など、ハッザをとりまく複数のファクターが食料獲得に大きく影響を及ぼすからこそ、こうした選択肢の多さと柔軟性はきわめて重要である。筆者は3人のハッザ男性との会話のなかで、「観光客が来なくてもブッシュに住み続けるか」と尋ねたことがある。かれらは「仕事（＝観光）がなくてもブッシュに住むし、トウモロコシ粉が買えなければ果実、獣肉、根茎などを食べるから飢えることはない」と答えた²³⁾。この返答にも、観光客が来れば現金を稼ぎ主食と副食から成る食事を摂るが、そこに固執はしないという態度と、観光客が来なくてもなんとでもなるという自然資源への信頼が表れているように感じる。

アフリカの農耕民も、複合的な生業をおこなうことで居住地の自然環境を最大限に利用して多種多様な食材を獲得しており（安溪ら2016）、食料の多様性や食料獲得にみられる柔軟性は、ハッザだけでなくアフリカの人びとに広く共通する特徴だともいえる。しかし、頻繁に移動をするという狩猟採集民の生活様式を考慮すると、定住する農耕民よりも食料選択は柔軟性に富むといえよう。市川（1986）が、アフリカの狩猟採集民は、周囲の条件に応じて社会の枠組をかなり変えることができる可塑性をもつゆえに、非常に多様な社会であることを指摘したように、ハッザも移動をしながら、それぞれの地域の状況に応じて生計手段を変え、食料の獲得方法も変わり、ひとくくりにはできない多様な地域差が生じていた。こうした狩猟採集民の食は、民族や地域を単位に食文化を検討してきたアフリカの食文化研究において、対象社会内部における変異幅の大きさやその要因についてのより詳細な考察が必要であることと、そうすることによって、変化し続ける人びとの食の実践をより詳細に追うことができることを示しているのではないだろうか²⁴⁾。

各地の狩猟採集民のなかには、開発や自然保護などの影響を受けて利用可能な自然資源が限定的になっている例も少なくない。ハッザに関していうと、これまでの他民族による農地や放牧地の拡大と自然保護政策の影響を受け、狩猟採集を継続できる土地の縮小が問題視されてきた。筆者が2018年に訪れたマカオWMA周辺地域では、自然保護区の設立により、ハッザは狩猟はもとよりハチミツ採集すら自由にできない状況にあった。こうした状況を受けて、タンザニア北部では市民団体を中心に、ハッザを含む少数民族が従来の生業活動を継続するための土地の権利を求めた運動が展開されてきた。権利運動は今後のハッザの生活を支えるうえで重要であるものの、一方で、本稿の雑草性植物利用の事例で論じたように、外生の影響を受けて資源利用の可能性は小さくなるばかりだとは限らない。周囲の環境をうまく使いながら生活してきた狩猟採集民だからこそ、現代的な変化を受けながらも、新しい形の資

23) 2012年12月10日、キャンプAに暮らす男性3人との会話。

24) 近年では農耕民を取り巻く環境もまた大きく変化しており、人の移動手段や食料の流通網が急速に発達したり、都市での就労なども一般的になったりしたことによって、食料選択は多様化していると想像できる。本稿の事例と、現代農耕民の食料選択における差異については、今後検討してみたい

源利用の可能性をも展開しうる将来を期待したい。

謝 辞

本研究のもととなる現地調査は、JSPS 科研費（26300012、15H02598、16K21411、17H01637）の助成を受けて実施した。現地調査においては、Dorobo Tours の D. Peterson 氏らから有益な情報を多数いただいた。また、キャンプ A のみなさんをはじめ、調査に協力いただいたマンゴーラの方々に感謝申し上げる。

引用文献

- 安溪貴子・石川博樹・小松かおり・藤本武（2016）「アフリカの食の見取り図を求めて」石川博樹・小松かおり・藤本武編『食と農のアフリカ史—現代の基層に迫る』pp. 23–52、昭和堂。
- Barnard, A. (2002) The foraging mode of thought. *Senri Ethnological Studies* 60: 5–24.
- Bird-David, N. (1992) Beyond “the hunting and gathering mode of subsistence”: Culture-sensitive observations on the Nayaka and other modern hunter-gatherers. *Man* 27(1): 19–44.
- Blurton Jones, N. G. (2016a) Why do so few Hadza farm? In B. F. Codding and K. L. Kramer (eds.), *Why Forage? Hunters and Gatherers in the Twenty-First Century*, pp. 113–136. University of New Mexico Press.
- Blurton Jones, N. G. (2016b) *Demography and Evolutionary Ecology of Hadza Hunter-Gatherers*. Cambridge University Press.
- Dorobo Fund (2020) Update from Arusha during the time of “Korona.” *Dorobo Fund Newsletter*. <https://www.dorobofund.org/news/2020/7/8/update-from-arusha-during-the-time-of-korona> (2021 年 1 月 31 日参照)
- Hawkes, K., J. F. O’Connell, and N. G. Blurton Jones (2001) Hadza meat sharing. *Evolution and Human Behavior* 22: 113–142.
- 市川光雄（1986）「アフリカ狩猟採集社会の可塑性」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学—アフリカに生きる』pp. 279–311、アカデミア出版会。
- 池谷和信（2021）「狩猟採集民の食—先史から現在まで」池谷和信編『食の文明論—ホモ・サピエンス史から探る』pp. 43–69、農山漁村文化協会。
- 今村薫（2010）『砂漠に生きる女たち—カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』どうぶつ社。
- 石毛直道（1968）「マンゴーラ村における四つの生活様式」今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究 上巻』pp. 65–100、西村書店。
- 岩井雪乃（2017）「奪われる住民の観光便益—タンザニア、ワイルドライフ・マネジメントエリアの裏切り」『アフリカ研究』92: 95–108.
- Kaare, B. and J. Woodburn (1999) The Hadza of Tanzania. In R. Lee and R. Daly (eds.), *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers*, pp. 200–204. Cambridge University Press.
- Madsen, Andrew (2000) *The Hadzabe of Tanzania: Land and Human Rights for a Hunter-Gatherer Community*. IWGIA Document No. 98. IWGIA, Copenhagen.
- Marlowe, F. W. (2006) Central place provisioning: The Hadza as an example. In G. Hohmann, M. Robbins, and C. Boesch (eds.), *Feeding Ecology in Apes and Other Primates: Ecological, Physical and Behavioral Aspects*, pp. 359–377. Cambridge University Press.

- Marlowe, F. W. (2010) *The Hadza: Hunter-Gatherers of Tanzania*. University of California Press.
- Ndagala, D. K. (1985) Attempts to develop: The Hadzabe of Tanzania. *Nomadic Peoples* 18: 17–26.
- 阪本寧男 (2009) 「栽培植物とは何か」山本紀夫編『ドメスティケーション—その民族生物学的研究 (国立民族学博物館調査報告)』84: 17–33.
- 田中二郎 (1971) 『ブッシュマン：生態人類学的研究』思索社。
- 田中二郎 (1994) 『最後の狩猟採集民—歴史の流れとブッシュマン』どうぶつ社。
- 富川盛道 (2005) 『ダトーガ民族誌—東アフリカ牧畜社会の地域人類学的研究』弘文堂。
- 富川盛道・富田浩造 (1980) 「タンザニアにおける開拓部落の成立と形成—マンゴラの社会生態誌」富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語』pp. 227–311、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Woodburn, J. (1968) Stability and flexibility in Hadza residential groupings. In R. Lee and I. DeVore (eds.), *Man the Hunter*, pp. 103–110. Aldine de Gruyter.
- Woodburn, J. (1982) Egalitarian societies. *Man (New Series)* 17(3): 431–451.
- 八塚春名 (2011) 「タンザニアのサンダウエ社会におけるニセゴマ (*Ceratotheca sesamoides*) の「半栽培」—乾燥葉の保存と分配に注目して」『アフリカ研究』78: 25–41.
- 八塚春名 (2017) 「タンザニアにおける狩猟採集民ハッザの観光実践—民族間関係、個人の移動、収入の個人差に着目して」『アフリカ研究』92: 27–41.
- Yatsuka, H. and K. Ikeya (2020) Farming practices among African hunter-gatherers: Diversifying without loss of the past. In G. Hyden, K. Sugimura, and T. Tsuruta (eds.), *Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods*, pp. 49–63. Routledge.